

農家經營の實際

清水及衛著

特255

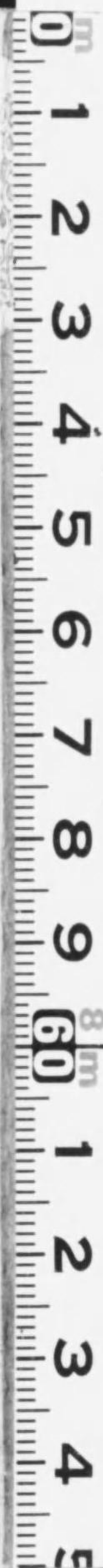
團年青合聯本 391

トツレフンバ業産

343

154

始



特 255
391



農家
經營の
實際



目次

農家經營の五要項……………(六)

一 人生觀の確立……………(六)

二 生活意識と其基準……………(八)

三 職業觀念の確立……………(一〇)

四 社會文明の進展……………(一四)

五 農村の社會構成の基準……………(一九)

農家經營の二大要件……………(二四)

農業經營方針の確立……………(二四)

農業經營の五條件……………(四〇)

一 協同的家族本位の勞力分配……………(四〇)

二 地力維持培養上無缺陷の組織……………(五一)

三 地理氣象の關係と販路又は自家利用轉換……………(五三)

四 土地建物機械等の固定資金……………(五四)

五 生産費と流通資金……………(五七)

農家家計方針の確立……………(六八)

一 分度生活……………(六八)

農家經營の實際

清 水 及 衛

私は農家經營の實際に付て申上げて見ようと思ふが、その前にお断りして置きたいことがあります。農家經營と申しても自然農業經營と農家の家計といふ二つに大體分れるのでありますが、農業經營のことを申上げると言ふても私は農業の専門的の學問をした者ではないから、從て私の話は組織的の秩序立つた話にはならなからうかと思ひます。又元來農家經營といふことは、有ゆるものゝ關係が結ばれて行くが爲に、一つの學科として成立つて行くには餘りにも複雑なる關係を持つて居るが故に、これ又組織立つた話にはならなからうと思ふ。この點は豫め御諒承を願つて置きます。それから私の申上げる農家經營は農業の部門にしても、農家の家計の部門にしても、孤立して我國の通例である所の小農が一町や一町五段の耕地を持ち、一軒の家を持つて孤立して成立つ

といふことは到底出来得ないものであると、私は信じて居る者でありまして、それが爲に協力に俟たねばならぬ。その協力も資本の共同といふ位なことでは最早今日の經濟事情、今日の社會事情として許されないのである。それであるが故に相互扶助に依る所の協力を俟たなければ、私の申上げようと思ふ農家經營の完成は出来得ないのだと信じて居る。それで産業組合の實際といふ題で申上げることになつて居つたのでありますが、知らない人は今柄にもなくそのやうなことを言ふものだからして、何か私が専門的の知識でも持つて居る如く考へる人があつたり、産業組合も曲りなりにも我國に制度の布かれる八年前から私はそんな運動に當つて居るのでありまして、丁度本年で四十年組合長として世話をさせられて來て居るのであります。その爲にこの方面に於ても相當な知識と經驗でもあるかの如くに考へる人があつても、私はその力も乏しいのである。それでは何か財産でもあつて祖先の遺産に依つて一家の生活の資源が得られるが故に、社會奉仕の目的とか或る理想の實現の爲にこの種の運動に當つて居るかといふと、私はその力も乏しいのであります。自分が家族と共に働いて一家の生活資源を取つて行かなければならない環境に立つて居るので、農村の共同の世話なんぞするやうな柄ではないのであります。なぜさういふ柄違ひの者がや

つたかと申しますと、やらねばならぬ實情の爲に叫んだのが縁になつて、今のやうな制度が布かれた時ではなかつたからして、私の叫んで始めて出來た相互主義の共同組合といふものは極めて小さなものであつた。一體私は十八歳の時に組合長にさせられたのであつて、本來から言へば十八歳の一人なら一家の經營或は農村の經營等に直接當らなくてもよい時代であるが、然し當時私の環境や私の村の環境が悪かつたといふこと對して満足することが出来得なかつたので、その叫びに共鳴する者が出來て、それが今日まで引續いて居るといふのであります。又或る人はそんな力の無い者が産業組合の世話なんぞしてどの位の報酬手當を貰ふのかと尋ねる人があつたが、私は曾て貰うたことがない。又今のやうに農村が疲弊し農家が行詰つたと叫ぶ今日に於てお前のやうな貧弱な者が、自分の家を経営した上にその餘力で農村の組合運動に當つて行けるといふのであるならば農村は亡びて行かなくても宜いぢやないかといふやうなことを能く反問されるのである。私が申上げようと思ふ悩みと苦心はその間にあることをこれから申上げて見ようと思ふ。

一體私は今も分らぬことが多いけれども、その當時は更に分らぬことが多かつた爲に、分つて居る先輩の教を受くべく村人に尋ねたのが縁である。一體何の爲に農業をして居るかといふことが

第一分らない。一家經營の目的は一體何處にあるのか分らぬ。それで年取つた先輩に聞いて見ると、分つたやうなことを言つて居る人でも結果は分るが原因が分らぬ。身體が丈夫で自分の信する儘に業務に勵んで働いても働いても農家の經濟力が劣つて来る。延いては思想の上にもともすれば混亂を來すといふ状態になるのは、一體原因は何處にあるか——今でも皆様にさう申しては失禮だが、私の家には毎年四千内外の人がこの頃訪ねて来る。何しに來たかと尋ねて見ると大抵その悩みと聞えである。農業は何の爲にするのかと聞いて見ると金を儲ける爲にするといふやうなことを言つて居る。儲かるかと聞くと大抵儲からないと答へる。それで君の家、君の村は榮えて行くかといふと、行かないと言ふ。何が原因かと聞くとそれが分らぬと斯う言ふ。だから今から四十年前の私の悩みは不思議はないと思つて居る。今の時代になつて悩みが減るかといふと減るところではない、益々増すのみである。今のやうな儘で推移して行くならば私は残念ながら、吾々の同志は、吾々の仲間、日本の小百姓は肺病患者が瘦せるが如く必ず瘦せ衰へて行かなければならぬ運命に支配されて居ると思つて居る。斯ういつたやうなことが縁になつて分るべきことが分らぬといふ位は分らなければ、吾々は人間としての存在の意義を有たないといふやうなことが縁になつて、

俺も分らぬ、俺も分らぬといふ仲間が出來たのが私の所の組合である。斯ういふ世話は本當から言ふと私のやうな者が世話をするべきではない。相當の知識があるとか經濟上の餘力のある人がするるのが本當だと言つたけれども、何しろ分らぬといふことを叫んだのも私だし、分らぬ仲間の分らぬ頭が俺だといふので、到頭分らぬ組合の組合長にはお前が一番適任だから、適當な人の出來るまでやつて呉れといふことで四十年やらせられて、まだ罷めさせられないといふ譯です。皆様の中には私の悩み當時の人も居るやうだし、現代の我國の農村、我國の農事情、我國の農業事情といふものは更に深刻だ。だからして私の申上げるとはその間に於て兎にも角にも方針を定めて實行をしたその一端を申上げるといふより外に私には何等の權威も力もないのでありますから、その點を含んで置いて貰ひたい。さうしてこれから午前中四時間に足らない時間でこの大きな問題を結論するといふことは私に言はせると少々註文の方が無理である。私は自分の縣内ではその農村の實情の調査が出來て居る所でないといふ限りの話は御免蒙つて居る。政治家が聲を大にして農村振興論を叫ぶといふやうな好い加減なものではない。そんなことでは納まりが着かない。又あれにもこれにも關係があるし、私の話は分らないのが有名であるからこれも一つ含んで許して貰ひた

六
い。一週ぐるらる話をしたのちや分らぬといふのが通例なのだからどうかその點は含んで置いて戴きたい。それから私は話を稽古したのでもなければ筋途を知つて居るのでもない、貧弱な田子作の言ふことだからどうかそれも許して戴きたいと思ふ。

農家經營の五要項

一、人生觀の確立

農家經營の實際から言つては或は縁がないやうに考へるか知れないが、この人生觀の確立といふことが私が一番悩んだ根源だ。吾々はどういふ人生を遂げたらよいかといふことが分らないと、私は農業のことなどを論ずるのは枝葉の問題だと思ふ。私は今でも農人としての自己満足といふよりも誇を持つてゐるのはこの點である。何の爲に生きて居るのかと問うても、それはハツキリ直ぐ答へ得られる人もあるけれども、答へられない人が多い。併し一個の人間であることを意識しない人はない。どういふ種族の人間であるかと言へば曲りなりにも日本人といふことを忘れて居る人はないでせう。大和民族であるといふことを意識して居らぬ人はないでせう。それならばその人類

七
としてその民族の一員として自ら人の道がある。これは難しく言へば限りもないでせうが正しく生きるといふことで盡きると思ふ。さうして自己の存在が必要であるとし尊重するものであるならば、その隣人も同じ考の人間であるといふことを意識しなければならぬ。正しく生きるといふことは言換へれば親が親らしく、子が子らしく、兄弟が兄弟らしく、夫婦が夫婦らしく、隣人が隣人らしく生きるといふことである。それが吾々人間としての道である。殊に吾々民族の特長としてはこれを完成して行く上に於て一家は一つの集團であり、一つの社會である。縦の關係から見ても横の關係から見てもこれが互に助け合つて行かなければ共存同榮は決して出来るものではない。吾々民族の理想は彌榮主義だと言つて居る。彌榮とは追進といふこととせう。追々進むといふことは言換へれば末廣といふことである。親より子は善かれかし、子より孫は善かれかしである。恐らく吾々民族は理窟なしに、皆様のお國は違つても家は違つても、一家の祝福をする時に他人が贈物をするのに末廣といふものがある。これは何も暑いから扇げといふ意味ぢやないでせう。それがどうです。この理想を實現することが吾々人間の目的であり、吾々の人生の一大使命であると考へたとき、今の日本の有様、農家の現状を見て満足出来る人があるとするならばそれは餘程變り者だ。自分の家

は假に榮えても隣の家が亡びるならばそれは彌榮ではない。この彌榮といふことが出來て共存同榮が始めて茲に生れるのである。私の産業組合はそれが爲に唯だ徒に物を高く賣るとか他人に損をさせても安く買ふといふことを目的にはしてゐない。そんなことは少數の場合に於て出来る同志討に過ぎない。總てに普及するならばそんなことは矛盾だ。永い生命力のあるものではない。斯ういふ風に考へて見ると親が親らしく子が子らしく生きるといふことは極めて平凡であるけれども眞理である。さうしてこの問題は一家の經營といふことを離れては解決出来ない。集團を經營して行くといふことになる。そこに生活の悩みが起るのである。

二、生活意識と其基準

生活意識とその基準を知ること、これがその當時に於ける吾々の悩みの源であつた。又吾々の村の疲弊の源でもあつて、聞いても分らなかつた。氣を付けないと生活といふことは時代の流に依つて他人の眞似をして生活して行くといふやうなことが一體多いのである。その眞似が果して正しく爲さねばならぬ必然的のことかどうかといふと、爲すべからざることを爲し、爲すべきことをしないで居るといふのが現状である。借りたことは承知してゐるけれどもないからやらないのみだ

といふやうなことを言出す。私はこれを分度生活或は必然的生活と唱へて居る。これは何が何でも必然的生活はやらなければ人間としての存在の意義を失ふのである。これを爲し遂げて行くといふことになる。相當に金が要る。その生活資源を得るといふことが伴はなければ、幾ら綺麗なことを言つても實現することは出来ない。この資源を得るのに人に依つては祖先の遺産に依つて生活資源を得る人もあるでせう。けれどもそれは極めて少いだらうと思ふ。少いばかりではない。そのみに依つて満足してゐる人であるならばそれは存在の意義はない。あつてもなくてもよい人間である。自分の人生の目的がハッキリ分らないとその位のことでは満足をしてゐる人もある。これは間違である。若し自分の村に間違つてゐる人があるならば能く研究をして、その仲間の間違は仲間の助け合に依つて改めて行くより外にないのである。年を取つた親父などの間違は學校に入れる譯にも行かず、講習に出掛けるといふ譯にも行かない。それであるが故にあなたの方のやうな人が中堅になつて正しい條理と理想の實現の爲に大いに働いて貰はなければならぬと思ふ。この生活資源は多くはこれを職業に求めなければならぬ。當講習會の目的もそれであり、吾々の數十年の悩みもそれである。

三、職業觀念の確立

職業の意識の出來てゐない人は、如何に立派なことを言つて居つても自己が獨立して存在する力を持つてゐないと思ふ。この職業は敢て農業には限らない、世は分擔であるから有ゆる職業があるけれども、今の國民の多數の上から見れば役人が割が好いと云ふても役人ばかり多くする譯には行かない。商業が割がよいと言つた所で商業は農工業の延長である。中間の釣合のみが取れて生産が増加して合はないならば共喰に終るに決つて居る。私はさういふ意味から農業といふことを自分だけでは深く信ずる。割がよいからやるの、割が悪いからよすのとそんなグラついたことであつてはならない。吾々の青年當時、村の札付の貧乏人の親父に聞いて見ても貧乏の原因が分らない。そんなことを考へる暇がないといふ。餘裕のある金持や地主に聞いて見ると、これは又働かなくてもよい環境に立つ人であるから職業の觀念を持つてゐない。あなたの家に金が溜つたのは一體何が故であるかと聞いて見ると、先代の遺産に依つて貸金の利息が遣入つてそれで俺の家は金持になつたのだと言つて喜んで居る人もある。金持になつてあなたが喜べば利息を拂つた人は金が減るといふことは知つて居るかと聞くと、それは減る。それに對してどう考へて居るかと尋ねると、それはどう

も約束だから仕方がない、他人のことは構はぬと言ふ。私に言はせると吾々はどんな人であつても一個の人間として存在して居る以上、喰物を喰べないでは生きてはいけない。着物を着なければ生きては行けない、又住居に住はなければ生きては行けない。言換れば富の消費である。吾々の人生が富の消費である以上、金の貸借で利息が遣入つた位で満足して居る者があれば、それは人間の目的が小さい人間である。利息を取つて金が蓄つたと喜ぶ人があれば、その裏には利息が出て減つたと悲む人が居る。これは能く考へて見れば富の増加でも何でもない。單に右から左に行つたといふだけである。利息が遣入つて蓄つたと言つて唯だ食つて居る人があるならば、それは唯だ富を消費してゐるに過ぎない。その反面には出た爲に食へないと言つて、何の爲に食へないのか考へる暇もない程心配して居る親父もある。商賣で儲けたと言つても同じことでせう。儲けたと言つて喜んで祝酒を飲む人もあれば、損をしたと言つて夜逃をしなければならぬ人もある。儲けた人と損をした人が一緒になつて御覽なさい。百も殖えたのではない。兎角近代の文明は資本主義經濟の原則の支配を受ける。近代文明は氣を付けないとその半面觀察だけに陥つて、農業をする者までが皆商人のやうな考へになる。それが今日の悩みを生んで居るのである。吾々のやつて居る農業はそんなもの

ではない。仕事は小さい、金は小さいけれども天地と共同事業である。どんなに科學が發達しても一粒の米をこの机の上で作ることは出来ない。そこに悩みもあるけれども、そこに吾々の職業の上から見てこの天地宇宙の間に於て無を有たらしめる、それが即ち産業である。吾々が努力して一段の田から米一俵餘計取つたつて、今年の相場なら七圓かそこらだ。そればかりのことに暑いのに騒ぎ廻るよりも、貧乏人を擲へて高い利息で金を貸せば容易く取れる。商人であるなら一口聞いてもそれ位は儲かる。併しそれは富の増加ではない。私共の努力の結果、穫れた一俵の米といふものは天地の間になかつた物を生んだのである。單に七圓云々といふ損徳の問題ではない。要らなければ要る人に呉れて宜いのである。人間が食はないといふならば鳥に呉れてやれば食ふのだ。穫れば減るかといふと穫つても減らないのは産業だけである。農業だけである。米がたとと穫れたから地が減つたかといふとそんなことはない、却て耕土の分量は増す。又穫らなければ殖えるだらうといふので五年も遠慮して穫らないで置けば、殖えるどころではない荒地になつてしまふ。斯の如く穫らなくとも殖えないし穫つても減らないといふのは農業以外に何がある。私は農業は吾々人間の身體と同じだと常に言つて居る。吾々の身體もその通りでせう。働く人の身體は早く弱るかといふとさ

うではない。車挽や郵便配達夫は足ばかり使つてゐるから、年取つたら足が弱からうといふとさうではない。これは今の科學の力や何かで分類判斷することの出来ない力を有つて居る。農業でもさうである。農業に依つて自分の家の生活資源を取つて行くことが出来るといふ途が立つならば、隣の家の人がその途を知らない、その道理を知らない、手段方法を知らないといふときには教へてやらなければならぬ。隣に教へたからと言つて俺の方が減る譯ぢやない。そこは商業や何かと全く違ふ。隣保相助なんといふことは口では言へるけれども、商業ちや實際に行はれない。隣の家が困るから俺の所では買はないで隣で買つて呉れなど言へば、直ぐ自分の店は潰れてしまふ。けれども農業はそんな氣遣ひはない。共存同榮の實現は農村でなければ望まれない。隣保相助に依つて共存同榮の實を擧げるといふことは市街地では残念ながら出来ない。このことをその方面に關係する人がハッキリ意識して行くならば敢て悲觀するには及ばないと思ふ。今日の現狀五十億の借金があるといふやうなことはよいことではないが、財産なくしても職業に依つて必然的生活を充して行くだけの資源が得られる。私は一番大事なのはそれだと思ふ。小作農業であつても日本人として正しい人間として生きて行くことが出来るだけの生活資源を取つて行くといふことが、私の農業經

營の上に於ける條件である。一つの作物を拵へてそれを高く賣つて金を儲けるといふことを言ふのぢやない。そんなことは長く續かない。そこで今自分等がやつて居る農業がその條件に適つた農業をやつて居るかどうかといふと、それが残念ながらさうは行かない、益々逆轉して行つて居る。その逆轉は一體何處から來るか、この點を一つ考へて見よう。

四、社會文明の進展

一體我國の農家經濟の原則は文明の程度が低かつた時代には自給自足であつた。自分の家の生活に必要なものを自己が生産してさうしてこれを自給する。であるからして豊作は豊年と一致して居つたのである。近年は——昨年あたりの例は豊作の凶年である。それは一體何が原因して居るか。これは近代文明の進展の賜物である。餘りよいものぢやないけれども刺戟劑としては私はよいものだと思つて居る。それで吾々は祖先以來恐らく原始時代からつい最近、日清戰爭の當時までは大體に於てこの自給自足の經濟原則に支配されて居つたのである。であるから澤山取れれば物は豊富に使へる。併し取れることを意識すると共に取れない年のことを意識して現物に依つてこれを繰越して行くといふのが農家經濟の建前であつた。私は常に斯う言つて居る。農業經濟といふこと

は學問にもあるし色々學者も居るし學校もあるけれども、それは主として平面的の比較論に過ぎない。米を作るより西瓜を作れば儲かる。斯ういふ遣方をすれば儲かるといふやうな平面的の比較に過ぎない。農家の經濟原則は平面では片着かぬ。天保の昔、二宮先生は『今年の生活は昨年の産業にあり、今年の艱難努力は明年の生活の爲めである』と喝破して居られる。昔者の言ふことだから古いと思ふか知れないが、あなた方自分の實生活を考へて御覽なさい。今日食つて居る米は今年の農業に關係のある米は食つて居ないでせう。今日あなた方が着て居る着物も今年取れたものではない。今米の値が上つたの下つたのと言つて居るけれども、それは昭和六年の農家の經濟には關係はないのである。今發育が良いの悪いの言はれて居る稻は昭和六年の生活に使ふべきものではない。翌年の生活準備として今耕して居るのだ。それであるが故に農業經濟といふ一つ切離した部分的の經濟といふものは平面的の比較論で片着くが、農家經濟は少く共三年一巡である。今年の生活は去年の農業が生み、今年の農業は來年の生活の準備をして居る。それが近頃は文明の進歩に伴ひ交換經濟が發達して來た爲に、そんなことは頭の古い者の者ふこと位に考へて居る人が多くなつて來た。それが又今日農村疲弊の原因を成して居る。今後に於てもこの經濟原則を捨てるといふことで

あるならば、私は農家は商家と同じで必ず破滅すると思ふ。昔から今日まで農業は學問その他の資格が整つて成立つものぢやない。私は常に農業は無斷職業だと言つて居る。斷りなしの職業である。誰も試験に合格して農業に這入つたといふ人がある譯ではない。何時から農業に就職したか、農業の就職年月日などを知つて居る人はありはしない。何時までやるか。これも人間から退職辭令が出る譯のものではない。恐らく埋葬許可證が退職辭令でせう。なぜ今日まで無斷職業であつたかと言へば偽りが出来ない、胡麻化しが出来ない、世に弊害を流すやうなことがないが故に無斷職業で結構である。であるから幾ら世が進み文明が発達しても農業だけは無斷職業で行くより仕様がなれと思ふ。吾々のやうなぼんやりした人間が無斷職業で何代も何代もその村に永住して、一家を相當に榮えさせることが出来る根本原因が何處にあるかと言へば、私は今申した三年一巡の經濟原則に依つて農家の家計が支配されて居るからだと思ふ。それだからこそ今日まで農は國の本であるといふやうなことも言はれたのでありませう。都會地の商家が三代以上榮えた例がないといふのは一體何が原因であるか。それは金が蓄つて大きな商ひをすれば儲かると決つてゐる譯ではない。儲けの反對は必ず損失だ。だからして金のみを土臺にして考へて行くと日本の農家も商家と同じ運命の

支配を受けなければならぬ。三年一巡と言へば或はのろまな仕事のやうだが、これは他の仕事に見ることの出来ない卓越した所の經濟原則だと思つて居る。農業者以外の經濟原則を調べて御覽なさい。俸給生活をして居る人なら八月の生活資源は何から取るかといふと多くは八月の俸給がその資源である。商業などになると今日の儲けで今日暮すといふ人もある。儲けは今日だか知らないが吾々の經濟を維持するものは今日のものではない。儲けがなかつたらどうなるかといふと借りて食はなければならぬ。全然違ふでせう。吾々は穫つて減らない所の天地の間に植えて生ました物を自分の家の生活に使ひ、尙ほ現場でこれを繰越して行く。昭和五年の生産當時に一石十六圓とか甚しきは十四圓など云つたものが、それを繰越して今日二十圓内外の相場になつたと言つても、事實はその金が這入る交換は昭和六年であるけれども、事業は昭和五年である。斯ういふ風に考へて見ると近代の文明が進展をして行けば行く程、これは意識してゐないとこれに引摺られる。この趨勢に依つて今日は自給自足ではなく交換經濟の原則の支配を受けるやうになつた。これは一體無理からぬことだ。なぜかと言へば近代科學文明の發達は通信の自由を擴大した、交通の自由を擴大した、從て交換自由を擴大した。この文明はお互ひ人類共通のものであつて、お互ひに許す範圍の自

由擴大の運動競争の社會組織である今日に於ては、斯の如くなくなつて行くべき運命の支配を受けなければならぬ。斯の如く通信の自由、交通の自由、交換の自由が擴大して來ると、茲に於て農家經濟といふものは非常な變化を來して來る。これは否定する譯には行かない。然らばこれに順應して行くにはどうしたら宜いか、これをハツキリ意識しなかつたら幾ら農家經濟論や何かの平面的の比較論をやつても、私は駄目だと思ふ。元來交換といふことは物と物とでせう。これは人類共通であつて國の境もなければ人種の差別もない。物と物とを交換するといふことであるから極く淺蕪な考への人だと、金さへあれば物などは自由に交換が出来るかと考へて、それ故金を得るといふことが目的のやうになつてしまつたのである。自給自足といふやうな經濟原則は昔の文明の程度の低い時は取れたかも知れない。併し今日は交換經濟の原則に依つて金がありさへすれば交換は自由に出来る。嫌な物なら作らなくても宜い。好む物なら何處でどうして作つたのか分らぬものまで自由に交換出来る。茲に於て日本のやうに耕地面積の狭い國土に現在のやうな多數の人が居つて、そんなことと何時まで行けるか。これは社會事情經濟事情の變化變遷のあることを覺悟しなければならぬ。私が三十年前この事を叫んだときに、警察の人に野郎少しをかしいのぢやないかと心配を掛け

て、相手にされなかつたものだが、併ながら何時の時代に於ても必ず或る程度の變化變遷はあるべきものである。それが無いと思つて居る人は餘程お目出度い人である。どうです。最早今日では資本主義經濟の下に於て米を營利事業として作るといふやうなことは出来ない。儲かるやうな米を作る方法なんてありはしない。蠶だつてさうでせう。殊に近年は非常な蠶の暴落である。國家の經濟が十六億某で六十億内外の國債があるといふので今大騒ぎをして居る。井上藏相などは随分喧嘩のやうになつてやつて居るが、吾々の借金も國家の借金より多くなつたし、又吾々農家の生産物の價格もこの一年間に國の一年の會計ぐらゐ下つてしまつたのである。故に自由擴大ではない、自由擴大の反面には不自由の擴大がある。これは世界的不景氣だから已むを得ないといふが、その原因は何かといふと社會文明の進展が或る程度まで行けば必ずそれが變化變遷をする。その行くところまで行つたのが逆轉したのであつてちつとも不思議はない、不思議はないが、この渦中に這入つて居るとなかく樂ではない。

五、農村の社會構成の基準

そこで斯うした問題に對して果して吾々農村がこれを解決して行くだけの覺悟と準備が出来て居

るかどうか。一體吾々農村の社會構成といふものは都會の社會構成の基準とは根本が違つて居る。それすらハッキリ意識してゐないやうな人が不幸にして吾々の仲間に多くなつて來たから農村は益疲弊するのである。都會の社會構成の基準は交換に依る。商ひをして儲けた金に依つてその生活の資源を得る。從て都會の社會構成といふものは金が根源を成す。資本の力が根源を爲す。人の力といふものゝ助け合は都會地に於てはどうしても出來ないのである。それに引換へて農村の社會構成は全然違ふ。職業が違ふ。生活の基準が違ふ。人柄が違ふ。更に言換れば農村は人を主とするが、都會は金を主として行かなければ成立つて行かないのである。その農村の社會構成の基準を考へるときに於て、人間が多う過ぎて困る。一面に何處に行つても人がゐなくて困る。何かの事業をやらうとすると俺の村にはさういふ人がゐませんと大抵言つて居る。私は先年柄にもなく各地の農村を廻つて見たが、村の先輩村長さんであるとか農會長であるとか産業組合の組合長であるとかいふやうな人に、あなたの村は現今の社會事情、經濟事情に對してどういふ態度を執つて居るかとか聞いて見ると、大抵困つたと言つて居る。どういふ所で困つて居るか尋ねると、借金が多くて困つたとか、人間が餘りに自由主義になつて困つたとか、何しろ村民に自覺がなくて困つたとか言つ

て居る。好い言葉ですよ、この自覺といふ言葉は……。村民に自覺が足らなくて困つたと如何にも本人は自覺して居る積りで言ふ。本人は分つて居るやうな顔をして村民はどうも分らなくて困ると言つて居る。少く共自覺といふことは反省の力に俟たなければならぬ。反省といふものには基準がなければ反省は出來ない。その基準を一つ教へて呉れないかといふと、實はそれが分らないのだと言ふ。こゝまで來てハタと行詰つてしまふ。その基準を何處に探るか、これを吾々は能く考へて見なければならぬ。少く共只今までお話しした五つの問題を能く考へて見て、割が悪いから農業を止すとか——農業を止め序でに人間も廢業するといふならこれは別だが、そんな譯には行かぬからして何が何でも吾々は人間的に生きなければならぬといふことを考へて御覽なさい。窮すれば通すとは能く言つたもので、必ず血路は開けるものである。而も大道がある。農業といふ大道がある。今までは農業をして居る人であつても事實は農道に這入つてゐない人が多い。農人でありながら商人の如き人が多い。農村の社會の一員でありながら他の社會の一員の如き積りで居る人が多い。そこで私はどうしても結論は人だと思ふ。先哲の言つた言葉があるでせう。吾に汝の村の青年を見せよ、然らば汝の村の將來を卜せんと。これは時が移らうが所が變らうが、吾々生産を業とする農人

に取つては千古の名言だと私は信じて居る。どの村に行つてもその村人の中で——吾々の如き老先の短い者は當にはならぬが、青年であの人の言ふこと、行ふことは常に正しい。あの人の言ふこと、あの人の行ふことを真似て行くなれば、人間の道を踏んで行くのに或は農業の道を踏んで行くのに間違はないと信頼されて居る人が居るならば、その村の今は借金があつて苦んで居つても、必ず將來に於て轉換して行くべき所の力を有つて居ると私は考へる。であるから農村に行つて見て、その事業の性質を見、その事業の發展將來を見ようとするならば、先づその村人の氣運がどうであるか、その村人の信頼の中心になつて居る人にどういふ一體人格の持主が居るか、一體どういふ理想抱負を有つた人が居るか、或はどういふ信念を持つて居る人が此處では中心になつて居るかといふことを見れば容易に分るのである。なぜかならば事業などいふものは人格の反映に外ならぬからである。だからしてどうしても農村に於てこそ中堅の人物がなければならぬ。尤も若い人々の口だけで言ふ力といふものは吾々農村の上には於ては弱いものだけれども、行つて自ら範を示すといふその力は歩みはのろくとも後に戻りはしない。その力が私は農村社會を構成して行く所の基準であると思ふ。それをハッキリ意識してさうして以上述べた五つの問題を相關聯してお互に語り

合ひお互にこれを握り合つて行くといふことであるなら、米が安くなるの藪の値が安くなるのといふやうなことでびく付く必要はない。更に世界的不況が來ても吾々は三年一巡の經濟原則を持つて居るのだ。現金こそなければ農家の臺所の現物を處分すれば三百や五百のものは何時でもあるのだといふので更に驚く必要はない。それを都會と同じやうに交換經濟でやつて行くと、今年の生活は明年の産業にありといふことになつてしまふ。養蠶地方などが——吾々の縣などもそれで随分參つて居る所があるが、去年の繰越で今年の生活をして行くといふ他に卓越した經濟原則を有つて居る農家が、明年の産業を當にして今年食ふといふことをやつて居るのは間違も甚しい。私は常に農家の經濟は子供の玩具の紙鐵砲と同じだといふことを言つて居る。紙鐵砲は玉が一つでは音がしない。一つは必ず詰つて居つて次の玉を入れると空氣の壓力でボンと音がする。さうして常に一つの玉は必ず残つて居る。即ち去年の産業で今年生活し、來年の生活準備の爲に今年の産業がある。所が近頃は科學文明の發達のお蔭で空氣銃が出來た。空氣銃は空氣を吸込むとボンと音がするけれども、吸込む材料がなくなつて來ると、機械は悪くはないが音がしない。來年の收入を今年吸込んでどん／＼打つてしまふと、來年取れるか取れないかも分らない。又取れた所でその市場の價格に

變動があり、或は幾ら賣らうと思つても買手がなければ駄目になる。私が是から言はうと思ふことも亦私の四十年來の悩みも詮じ詰めればこの問題である。この問題を中心にして自分の一個の個人としての考へ方、一個の人間としての生活意識、その基準を何處に置くか、その資源を何に採るか、職業に依つて取らうとするならばそれを農業に依つて取る。その農業は社會文明の進展に依つて常に變化變遷がある。併し變化變遷があつても農人として生きる途があるならばその途を辿つて行けばよい。それには人を主とした所の相互扶助に依る。それに依つて隣保相助の共存同榮も實現が出来る。それが又産業組合といふ形にもなつて現はれて來るのである。以上が私の叫びの根本であります。

農家經營の二大要件

一、農業經營方針の確立

農業經營の方針と申して見た所が詮じ詰めれば

(1) 資本主義的の營利企業

(2) 自家勞力的の勞作企業

の二つに分れると思ふ。即ち今日まで我國の農業は資本主義的の營利企業、この經濟原則と指導原理に依つて發達して來たのである。それが前に申上げたやうな社會事情經濟事情の變化變遷に依つてやつて行くことが出来なくなつたといふことが、現在の行詰といふ言葉に變つたのである。なぜ出来ないかと言へば、營利を目的としてやつて行くといふやうな原則でも、段々世が開けて行く當時に於ては或は少く共物價の異動の少い當時に於てはそれで行つたのであるけれども、最早今日ではこの資本主義的營利企業の經濟原則、指導原理に依つてやつて行けるといふ農業はない。現在のみにてなく將來もなり得るものではないと私は思ふ。米の例にしてもさうである。私は朝鮮の主として南鮮(木浦、群山等)地方の米の生産状態、或は經濟状態を調べて見たが、今より四年前に内地では米一石の生産費が三十五六圓掛つたときに二十圓内外で出来る。さうしてそれを汽車に積み船に積んで大阪東京の市場に輸送する。この點近代文明科學の恩恵に浴することは吾々と變りはない。この二十圓内外で出来たものが内地の三十五六圓掛るものと市場で競争するのであるから株式會社でも米作りは出来る。現にやつて居るので不二興業株式會社などはそれに依つて成立つて居

るのである。北海道の事情を調べて見てもその通りである。これは食糧需給の政策からも来て居りませうが、不毛の地を開拓して耕地にするのに土地を無償で與へて、而も三十年無税の土地で近代科學文明に依る所の栽培の技術と交通機關を利用するならば、彼の地に於ては引合ふけれども、瑞穂の國の本家本元たる吾々はそれと競争する力は遺憾ながら有たないのである。北海道邊りは更に土功組合を拵へて水を引入れて田にするならばその工費の半額は國費で出してやるといふことになつて居る。土地を無償で貰つた上に國費で出して貰ひ而も三十年無税である。それで過燐酸の牛吠もやれば六俵ぐらゐ穫れるといふのと市場で競争すれば負けるに決つて居る。吾々は餘儀ないからやつて居るけれども、それだけを目的で何時までもやつて行くといふことなら本家本元の瑞穂の國は非常に情けない状態になる。であるが故に資本主義的營利企業の指導原理はその方面から言ふと斯ういふ缺陷がある。生産費が高いが故に市場價格が引合はない。それで生産費を低めるには何が低められるかといふと、第一に内地では土地の負擔が多い。貸借にすれば地代が多い。この地代の問題は今尚ほ何處にも起りつゝある。これは是非改めなければならぬ。小作人は結束して地主に負けろと掛合ふ。それが今日の農村の社會問題となりともすれば思想問題ともなつて居るので、

これは單なる經濟問題ではなく、眞面目に研究しなければならぬ一つである。小作人は地主にその尻を持つて行くが、自作農はその尻を何處に持つて行くか、持つて行きどころがない。これはどうしても負擔の軽減を何とかしなければならぬ。そんなことを言ふと政談演説みたやうになつてしまふから申上げないが、今度は肥料代はどうか。肥料代は減らさうとすると作物が出来ない。肥料がなければ農業は出来ない。そこに於て勞力が掛り過ぎるといふことが出来て来る。これを減らさうといふことになる。今まで人力に依つてやると脱穀調製に十人假に掛つたとする、これを一日一圓と見ても十圓である。これを近代の科學文明の力に依つて改良農具或は動力等に依つてやるときには五人分の經費を掛ければ出来る。これはどちらが利益であるかは直ぐ分るでせう。それで改良農具の指導獎勵の爲に、私の縣などは動力農具を買つたものには縣費で補助を出し、専門に技術者まで入れてやつた。誰が考へて見ても十圓のものが五圓で出来るならばこれに依つて生産費を軽減して、儲からぬまでも損を少くして行かうといふ考から、農民はこの指導原理、經濟原則に依つて力を盡して來たのである。固よりそれが悪い譯ぢやないけれども斯ういふ風にやつた結果が何處に現はれて居るかといふと、年の終りになつて今までよりは剩餘が出たかといふと、計算だけでは生

産費の軽減は出来て居るけれども、農家の實際から言ふと五圓更に前年よりも欠損になつて居る。その欠損は祖先の遺産を以て補ふか、然もなければ借金をして補ふかそれより外にない。これは理論だけを机上で論ずるならばその通りだけれども、實際はさうではない。株式會社のやうに資本を以て勞力といふものを賃銀に依つて支拂ふ場合には、この方法は確によいのだが、日本の小百姓はそんなものではない。推定計算では五圓の減少をしたのだけれども、事實は機械代とか油代とかいふやうなもので現金の支出を五圓だけ前年よりも増加したのである。さうして茲に減少した勞力を以て他の事業を起して少く共五圓以上の現金取入の途が立たなければ、その農家は前年よりも五圓だけ支出が増すといふ結論に到着するのである。これを使はなければ近代文明とは没交渉になるが、併しこれのみに依つて行けば働く日數も減少する。それであるから私の信ずる條理から言ふと何處で調べて見ても吾々の仲間は三割内外の失業です。けれどもこれは農林省の統計にも内務省の統計にもない。農業は無斷職業なるが故に農民の失業統計はないのです。失業の者はと言つて話しても誰が失業やら分らぬ。親父だらうか俺だらうかと言つて迷ふ。實にこれは奇現象だ。だから御覽なさい。今より十五年位前までは農民の勞力呈供は一年に二百日であつた。併し二百日では

少過ぎるといふのでその餘つた勞力を利用して事業を興せといふので國に副業課を設けた。又府縣に副業の主任を置いて力を注いだのもその爲めである。けれども事實は年々これが減つて行くのみです。つい三年ばかり前は百八十日になつた。それで私はこの調子で行くと今後十年の後には百六十日になる。三百六十五日の中に百六十日しか勞力を供給することが出来ないときに、始めて失業といふことが——吾々の仲間が如何に考が鈍くても何等かの上に現はれて来るべきであらうといふことを叫んだが、一昨年國が調査をして全國を平均して見たら既に百六十日になつて居る。皆様の家、皆様の村はどうなつて居るか知らないが、恐らく百六十日以下の人が多いかも知れない。して見ると改良農具に依つて勞力の減少を圖るといふことは、資本主義的營利企業の經濟原則で言ふならば、勞力は支出であるから支出が減少すれば残りが多くなるといふ結果になるけれども私と言はうとするのは第二の自家勞力的勞作企業である。日本の一町や二町の小百姓は資本が根柢ではなくして、家内に働く人があり、その人の觀念とその人の體力が伴つて働くといふことが一番の根源を成して居る。さういふ原則から見ると自家勞力を減少するといふことは收入の減少になるだけの話だ。出ると入ると違ひだけですけれども、これは承知してやつたのだから勞働爭議のや

三〇

うに争議は起らない。なぜならば失業にならせ手となり手とが同じ人間なのだから……。私が農民の失業問題を解決しなければ駄目だといふのもそこでです。だからしてこれは餘分のことのやうであるがしつかり研究して貰ひたい。これが分らぬと株式會社の支配人にでもなつたやうな積りで努力を無暗に減少すればそれで儲かつたやうな氣になる。勿論生産費の減少といふことは悪いことではない。それもやるけれどもどうしてもつと働く日数を殖やさなければこの問題は片付いて行かない。私は日本の農業が文明に遅れて居る／＼と言つて居るけれども、遅れて居るところではない。寧ろ逆行だと思つて居る。私はそれだから農業發達して農家亡ぶと言つて居る。農村の組合發達して却て農村が疲弊すると言つて叫んで居るものであるから、産業組合の専門の人からは私は謀叛人のやうに見られて居る。併し事實逆行して居るのだから仕方がない。名古屋に行かうと思つて安城から上りに乗れば東京に行つてしまふ。見定めも付けずに上りと下りを取違へて乗れば飛んでもない方に行つてしまふ。今の農村がさうだ。支出を減少する積りで自己の収入を減少して居る。一體働かないで儲けるといふことが吾々の目的であるといふ風に考へるならば日本の農業、日本の小農は成立つものではない。共同經營などに依つて計算すると非常に生産費が少くなるからといふので

共同經營がよいといふが、事業そのものはよいけれどもその一家の生活費を何處から持つて來るか、持つて來る所がなければ結局それだけは借金をして補つて行くより外に途はないのである。これは常に抽象的な議論だけぢやない。私は群馬縣の囑託になつて居るが、今より十一年前から時の知事や内務部長が、農村の小作問題、思想問題、借金問題等に對してどうしたらよいか、私に考があつたら献策しろといふことを言はれた。それで今言ふやうな理論を能く徹底せしむるより外あるまい。微力ながら自分もそれを實行して居り、又自分の村の吾々の信頼する間に於てもさういふことをやつて居るが、間違ない。數十年やつて居つても間違ないといふやうなことから私の縣では今では随分これには力を入れてやつて居りますが、今では私だけではなく縣の農務課の主任は固より、試験場の所長等がこの方面の指導に當るといふことになつて居る。さうして毎年その農村の一戸々々を單位にして一つの集團を成すものを平均して統計を作つて、これを縣下の農業團體——この農家經營方針を執つて居る團體が今千以上もあります——にこれを分けてやる。こんな細かい數字だから餘程根氣の好い人でなければ見る人も少い譯だが、斯ういふ殆ど二萬六七千戸に互る平均を調べて見ても私の理論は間違ないといふことが言ひ得るのでこの事を一言御参考に申上げ

て置きませう。

それで全国の農業経営の審査會などの小農経営の統計を取つて見ても、家の者が働かずして工夫だけでやるといふのは、農業の資本主義的の計算で言ふと非常に資本の利廻がよいといふやうなことでやつたものがあるけれども、その農家を支へて行く力があるかどうかといふことになつて來ると駄目です。全国で有数な小農経営であると稱して視察が殺到して困るといふやうなものが私等の縣内にもあつた。私も縣で指導を託されて居るから行つて見ると、確に割合はよいけれども、この生活資源で君の家は暮して行けるかと聞くといけないと言ふ。いけないでどうするかといふと借金をして居ると言ふ。それで氣を付けないと何だぞ、終ひには家が潰れるぞと言つたら、もうこの頃はスツカリくたびれちやつたと言ふのです。農業が發達して農家が亡ぶといふのは此處である。それは總括した上から見た農家ではなくして割合から行くからいけない。幾ら割合がよいからと言つても要りもしないものを買ふのが今日の狀態である。乗合自動車が安いからといふので必要もないのに乗つかるといふのと同じだ。これは是非皆様もお考を願つて、若しあなた方の村全體が駄目だつたら部落でも結構だ。是非これは調査をして貰ひたいと思ふ。

先づ一戸當りの要素、人口が幾らあるか、殖えるか殖えないかといふことが根本なのです。さうすると私の方の平均で言ふと人口が六・七ある。食込んだの食へないのといふことはこの六・七の口の動きが悩みをなして居る。この六・七のうち壯者（十六歳以上六十歳以下の男女で生活資源を得る者）は幾らあるかといふと三・五しかない。パーセンテージで言ふなら五二%しかない。だからして一家を支へて行かうといふことになる、十六歳から六十までの農業に従事し得られる年齢に達した者は、自分の働きに依つて自分が生きる資源を取るといふばかりでなく、働くことの出來ない子供と年寄を一人が大體に於て一人を養つて行くだけの勤めをしなければならぬ。これは家族主義を尊重して居る農家であるならばそれが當り前であるが、さうなつて來ると容易ぢやないことになる。そこでこの三・五が働く觀念がないといふならば、それはどうしても教育に俟たなければならぬ。

併し働く觀念が出来ても働き得られるだけの要素がなかつたならば働くことが出來ないのである。それが困つたことには我國の農業としては天然要素たる耕地の分量が甚だ少いのである。私の方の二萬六千戸ばかりの平均を申上げて見ると、先づ田が僅に三段七畝、畑が二段七畝、桑畑が四

段二畝、計一町七畝しかない。この外山林とか何とかいふのが一部あるけれどもそれは大したものではない。これだけの天然要素では自給自足経済の取らなければ使ふことが出来なかつた時はよかつたが、近代文明に恵まれて自由の擴大して居る今日の生活資源を得るといふことはどう考へても無理である。私はこの天然要素は少く共人口一人に對して四段以上なかつたならば一家を支へて行くだけの生活資源は取れるものではないと言つて居るけれども、遺憾ながら群馬縣はさうはない。群馬縣ばかりではない全國平均しても日本の百姓はさうはない。だから幾ら働く觀念が出来ても——今はさういふ觀念がないから平氣でゐられるけれども、働く觀念が出来て来ると——働くべき所の仕事がない。であるから私の言ふやうな自家勞力的勞作企業といふやうなことは今まで學者も餘り言はなかつたし、又吾々の仲間も早く仕事を片付けて活動でも見るといふことが文明の恩澤だぐらるに考へて居つたから平氣で居つたが、生活資源が取れないで始めてこの頃氣付いて見ると、天然要素だけでは駄目だといふことが分つた。

そこでどうしてもこれには人為要素を加へなければならぬ。先づ第一に養蠶——これもやらないで遊んで居るよりもよいけれども、これに全部の力を入れてやるといふのは一種の迷ひです。——

この養蠶はどの位の程度の掃立をして居るかといふと、私の所では一戸平均一五・七枚といふことになつて居る。それから馬が〇・四、牛が〇・〇六、豚は〇・四二、鶏が七・九、それからその他の副業として養兔などをやつて居りますが、それが〇・九ある。併しこの天然要素と人為要素だけで働いたものに依つて生活を支へる力があるかどうかといふと、これだけではまだ駄目である。

然らばこれの粗収入（私はこれを勞役の収入と言つて居る）はどれだけあるかといふと、一戸平均千百八十八圓しかない。而してその内容を見ると耕種農業が四五・二%、養蠶が四〇・八%、養畜が二・六%、其他副業とも稱すべき勤勞收入等に依るものが一一・四%といふことになつて居る。そこでこの粗収入を取るのにどれだけの費用が要るか、即ち農業經營の經費がどれだけ要るかといふと四百九十七圓である。であるからこれを差引いた残りの六百九十一圓といふものが（私はこれを報酬と言つて居る）生活資源になる譯だ。さうして壯者一人當りにこれを割當て見るとその報酬僅に二百八圓である。又最低一年二百日働くとして一人日當りは一體どの位農業の勞力供給の上から報酬を取つて居るかといふと、一圓三錢といふことになつて居る。それから六・七の人口一人當りにこれを割つて見ると百八圓。これを一日當りにして見ると二十九錢七厘である。これ

で生活を支へて行かなければならぬのであつて、今までの例で言ふとこれだけではやつて行けないのです。幾ら必然的生活と言つてもこれだけではやつて行けない。それであるが故にその不足が必ず負債若くは不義理になつて現はれて来るのである。

更にこの報酬の割合を考へて見る。所謂収入の分配と言つて居るが、収入がどういふ割合で分配されて居るかといふと三つに分けることが出来る。その第一は農業經營の三大要素である所の土地である。これは總て私共は財産の收入を見ないで農業といふもので見て居るが故にその土地に行はれて居る平均小作料を以て基準として居る。さうすると土地の負擔は一九・二といふことになる。これは十年前から較べると非常に下つた譯である。それから農業經營の爲に現金を出す、所謂消耗資本はどうであるかといふと、この割合は段々殖えて行つて二二・三となつて居る。第三が自家勞力です。これに對しての割合は五八・五で、自家勞力の提供に依つて曲りなりにもこれだけの報酬を取つて居るが故に、今日農家が俄に潰れないといふ譯である。

併ながら今までの述べた數字は五ヶ年間の平均數字で去年のものではない。去年のものはこれと較べてどの位減少して居るかといふと、これは國が調べた計數がこの間新聞にも出て居つたが、私の

調べた數字は今までのものに對照して見ると斯ういふ状態になつて居る。餘程氣を付けなければやつて行けないことがこれで能く分ると思ふ。細かい數字は省きますが、粗收入に於て五八%しかない。即ち千八百八十八圓あつたものが六百九十一圓、四割二分の減少です。この間の國の統計を見ても四割二分となつて居つたが、私の方の群馬縣などは養蠶があるから餘計影響がある譯です。さうして支出の點で見ると、以前から見れば減つたが六六%の支出であるから、そこで差引いた報酬率は三百五十九圓で、割合で言ふと従來の五二%になつたのである。さうして壯者の一人當りは従來の二百八圓が少いといふのに去年は百三圓しかない。それから一人日當りが従來一圓三錢三厘のものが五十一錢八厘、又人口一人當りの生活資源が五十四圓、一日當りが十四錢八厘といふ風にそれぞれ減少して居る。今年も恐らくこれと大同小異だと思ふが、この位極端な變化振は私がこんなことを知るやうになつてから二回目である。もつと酷いことがあつた。皆様は御存知ないでせうが、西南の役の後に政府が不換紙幣を倍額發行したことがある。それで物價が三倍になつたのが明治十六年から十七年に掛けて元の通りに不換紙幣を整理したら物價が三分の一に下つたことがある。一石十五圓内外した米が四圓臺になつたことがあるが、それに較べればまだ私等はさう驚きは

しないけれども、さういふ事情を知らない人を見ると驚く。

斯うしたやうな上からこれを判断して見ると、如何にしてこの難局を打開するか。この頃は難局打開とか行詰を展開するとかいふことが盛んに叫ばれて居るが、農村もそれだ。確に見様に依つては吾々の縣内などもこの平均状態ではやつて行けない。併ながら私の調べた(一郡二ヶ村)ものゝ中、約二割は昨年の農業事業でも相当生活資源を取り得たものもあるのです。これは少し諄いが此處で申上げて置いた方が都合が好いと思ふから申上げるが、私は今までの農業の粗収入が第一に少いこと、それから経営の爲めの支出が多いといふこと、それから自給自足といふことを離れてまるで金を取つてそれで物を買ふといつたやうな商業の經濟原則と同じやうにやつて行くことは、これは、どうしても根本的に改めなければ駄目だと思ふ。であるから今まで千二百圓内外の粗収入であつても、この中重要な食料は自給自足しなければならぬ。喰物を買つて食ふやうでは駄目だ。他人を頼むやうなことがあつては駄目だ。さうして又農業經營の爲にこんなに金を出さなくてももつと収入を得る途はある。それで私の例で言ふと斯ういふことになる。粗収入が假に千二百圓あるとするならば、食料に約二〇%、農業經營の爲めの、支出が二〇%。それ以上は出し過ぎる。地代

のやうなものも二〇%以上出したらそれは高いです。既にこれだけで六〇%になる。若し便宜上この二〇%を二百圓とするならば六百圓は出てしまふ。そしてそのあとの六百圓、少くも五百圓以上の現金を食料以外の家計に充當することが出来なければ、必然的生活をなす獨立したる農家といふことは出来ない。詮じ詰めると兎に角報酬の増加して行く手段方法を農業の組織經營の上にこれを求める。それで尙ほ足らぬといふ場合は、必然的の生活基準に依つてお互に無駄を省く工夫を、これは社會的にやらなければならぬ。斯ういふことを叫んで居つたが、昨年や本年のやうな状態であるとその度が更に増した。けれども今は物價も下つて居るから支出が段々少くなつた譯だが、それにしても少く共三百五十圓以上、農業經營費や食料以外の現金支出として充當するものが、職業上から得る生活資源に求められなければ小作農業は成立つて行けない。同時に自作農業は成立つて行けないのである。然るに今日の農家の状態は先程もお話申上げたやうにその粗収入に於て非常なる減收を來して居る。それは小作農業よりも自作農業の方が今日は更に苦しいのである。斯の如き状態を今後長く繰返して行けば日本の自作農といふものは段々亡びて行くより外に途はない。餘分なことで大變時間を費しましたが斯ういふ見地から見ても第一の資本主義的營利企業では最

早立って行くといふ望みはない。第二の自家勞力的勞作企業に依る外ない。この方針がシツカリ決まらなると農業の組織經營が甚だ矛盾撞着の組織になるのである。方角を決めずに歩いて駄目だ。汽車に乗るのに慌て、上りと下りを取違へて乗つたのでは仕様がなない。それであるが故に私はこの第二の理論、即ち自家勞力的勞作企業に依つて吾々農家は立つべきものであるといふことを根本問題にして居る。

一 農業經營の五條件

(1) 協同的家族本位の勞力分配

借て以上述べた所に依つて農業經營の方針は確立したが、その條件が決つてゐないと非常に迷ふ人がある。私はこれを農業經營の五條件と言つて居るが、この五つの條件を具備すると否とに依つて、その農家の生活資源を得るか得られないか決まるのである。

第一は協同的であつて家族を本位にした勞力分配の組織たることを條件とする。さうして私の信する條理から言ふと、壯者即ち十六から六十までの人は公務に就かない限りは身體が丈夫であれ

ば働かなければならぬ。さうして一人當り少くとも三日に二日以上、一年で言ふならば二百四十日以上働く覺悟を以て働き得られるだけの要素を整へて置く必要がある。而してこれは一戸一戸では出来ないが故に茲に協同的といふことを加味して居る。それから一日當りの報酬は金などで決めたのではぐらつき易くて駄目であるから、私はこれを白米三升以上と決めて居る。これはどんな小作であつても誰にでも出來得られるやうな農業組織と經營に依つてこれの實現の出來るやうにして行けば、何等遺産がなくても財産がなくても必然的の暮しはやつて行けるのである。これも唯抽象的に議論をして決めたのではない。殊に一番悩んだのは今より三十年ばかり前にどうしてもこの問題が分らなかつた。老農に聞いても分らぬし學者に聞いても分らぬし、仕方がないから要するに經營といふことは應用だから、俺自身がやつて見てどうしても自分に出來ないといふことであつたらその説は取消さうといふので、三年の間全部財産收入から得るものや——幾らも財産收入はありはしないけれども、さういふものを全部入れないで、働かざれば食はないといふ原則に依つて自分の暮しの標準を決めてやつて見た。やつて見た所が——それで私は帳面を付けるといふことを遣り始めたのであるが、一年やつて見た所が自分の働きのないのに驚いた。私ばかりではない。私のうち

の家族が働けない。これでは迎も駄目だといふので、二年三年四年とこれを繰返して幾分づつの改善をして行つた。その結果辛うじて四年目頃になると働くといふことも殖えて来たし、無駄をせぬといふことにもなつて来たから、これならやれる。昔に俺のみがやれるだけぢやない。日本の一戸當り一町一段位の自作農になるのならば十年乃至十五年の年期があれば、何等他人に迷惑を掛けなくとも誰にでもやる事が出来るのぢやあるまいか。第一に俺が一つやつて見せるといふので、その時分は私は今より能く働けたものですからやつて見せた。それが私の村などで私のやうな者を、あれの言ふことなら嘘はあるまい。あれの眞似をしたら間違はあるまいといふことで信用をして呉れた。それだからこの頃は好い加減なことを村の人に話をしないことにしてゐる。未だ研究中といふので話さない。それでこれは理論から追つて行くと譯はなささうであるけれども、二百四十日以上十六から六十までの人が働き得られるやうな農業組織にして行くといふことは、理論ぢや一口に出るけれども、實際はこの問題が一番面倒である。私共の悩んだのもこの問題である。さうして個人では解決出来ぬといふので協同の力に依つてこれを實現しようといふことが、農村に於ける組合運動の起りである。唯單に出来た物を高く賣るの、必要な物を安く買ふのといふことではな

い。勿論それもやつては居るけれども、そんなことが主眼ではない。これは皆様のお家はそんなこととはないかも知れませぬが、皆様の村の人々に聞いて御覽なさい。一家がどの位働くか。私の所には一年に三千も四千もの人が来るが、その中の若い人に聞いて見ると、私は殆ど年中働いて居ると言ふ人が多い。年中働く人のある家は年中休んで居る者が居りはないか聞くと、親父がブラブラして居ると言ふ。私は能く斯う云ふ例でお話して居るのだが、私の所の組合では事業の計畫をすること、方針を立てること、組合員及其の家族を指導訓練することといふ風に分擔規定を拵へてやつて居るのだが、斯ういふ問題が何時も出て来る。嫁を貰ふ。嫁を貰ふ頃の親御さんは誰も同じと見えて、あなたの息子さんはもう嫁を迎へねばなりませんねと言ふと、皆同じやうに、心懸が優しくて身體が丈夫で能く働く者を貰ひたい。適當な嫁があつたら世話をして呉れといふことを能く言はれる。さうして嫁を貰つた家があれば私はあとで必ず聞く、あなたの所は良い嫁さんを迎へて洵に仕合せだが、仕事は何を殖やしたかときくと、仕事は殖やさないが、嫁が働くから私が樂だと云ふ者が出来て来る。そんなことをして居ると孫の二人も出来るやうになると直ぐ悩みが起る。どうも嫁は能く働くけれども他人が這入ると掛りが多くなると見えて少し大事になりましたと言ふ。

手がプランとして口ばかり動けば掛りが殖えるのは當り前である。それは簡単な理窟だ。ですから私の所も女の子供が三人程あつて皆他へ呉れたが、私は呉れるときの條件として、俺の家の子供は學校にも行かないし氣も利かないが、身體は丈夫で食物は能く食ふから食物だけは食はして呉れ、併し食込みの相談には今後のりませんからと私は呉れへも言つてある。又嫁も幾人か貰つて、うちに二人居るが、嫁を貰ふときも同じ條件だ。俺の家に来ると働かなければならぬがどうだ、食潰しに来るといふのならそれは俺の家の爲に賛成出来ない。働くといふことであるならば直に仕事のあるやうに計畫して待つて居るが、それが厭なら御免蒙ると言つて居る。簡単だけれどもこれは昔の自給自足の經濟原則で来て居ると、近代の人は資本主義的經濟原則に依つて来て居るから、手が殖えると樂が出来るといふことを大變に幸福に思つて居る。だからして親父が働く家は若い者が大抵働かないものだ。親父が氣の毒ぢやないかといふと、理窟は今の者だから達者なもので、あなたはさう言ふけれども、俺の所の親父は働かなければ氣嫌が悪い。親の御氣嫌に逆ふといふことは子の道ではないから譲つて置くのだと言つて親父に稼がして居る者がある。さうかと思ふと嫁が来て働出したから、もうあの家はよからうと思つて居ると、六十にもならない親父がもう是

で樂が出来ると言つて直ぐプラン／＼になつてしまふ。これは傳統的の遺風です。農家の自給自足の傳統的遺風であつて容易に取れない。それと近代文明が俄に進展して来たものであるから、今の人々は早く片付けてさうしてあとは働かないで金を儲けることに熱中して居るから不思議に思はない。儲かるうちはよかつたけれども儲からなくなつて来るとその缺陷が現はれて来る。だからして二百四十日働き得られるやうにするには——農村の補習學校でも結構です。私の村では補習學校の先生や生徒にはそれを勧めて居る。それで今では農業日誌といふこんな帳面を使つて居る。今から二十何年前から私の所の産業組合は成績が良いといふので農商務大臣から賞金を貰つたこともあるが、その頃は農業經營といふやうな言葉は餘り使はなかつた。それで私の所では農業經營のことを研究してゐるらしいといふので矢鱈人が来て尋ねる。答はこれだ、この帳面をお付けなさいと言つて三四年の間はありもしない小遣の中から印刷費を千圓以上出して斯ういふ帳面を拵へて来た人に呉れてやつた。所があとで會つて君の所の帳面はどうしたと聞くと、貰ふのは貰つたが付けなかつたといふ人が多い。それで私はこんな馬鹿氣たことはない。財産でもうんとあればよいけれども、自分のありもしない金を千圓も出してさうして付けもしないのに呉れてやるのは馬鹿らしいと

思つたから止めてしまつた。さうしたらその中に付ける人も出て来て、十年位立つてからどうしてもあの帳面を付けるから實費で分けて呉れと申込んで来る人もあつて、實費で差上げて居る。所がこの間などは私の所を帳面屋だと思つたのか、纏めて注文すれば幾ら割引するなんて言つて来た人がある。これは是非研究して貰ひたい。併し強ゆる譯ではない。私の帳面を買つて貰ひたいと云ふ譯ではないからそこは誤解のないやうに願ひたい。

そこでこの帳面は餘り面倒なのは駄目です。帝國農會あたりからも出して居るが——僕等もあの形式は相談に與つた譯だが——、少し面倒のやうだ。併し百姓をするのに帳面ぐらゐる付けれられないやうでは日本の農業は終りである。これは普通の小學校を出た人なら付けることが出来る簡単なものであるが、その要點を申して見ませう。

先づ第一に人別の労働月表といふものを作る。これは一ヶ月毎に作るのです。そこで此處に名前を書くのであるが、名前などは番號でもよい。親父なら第一號、母親があれば二號、或は兄を三號、嫂を四號とでもすればよい。さうしてこれを付けるのはあなた方に出来ないなら子供でも結構、小學校に行つて居る子供ならこの位のことは付けられるでせう。女の方であつたなら尙更結構で

す。さうして毎晩食事のときにも點呼をやる譯です。今日は一號は労働したか——私などはもう除籍されてしまつたが——、働かなければ一號は〇と記入する。二號はどうかといふと二號は辛うじて〇・五働いた。三號は一・四號も同じく一・働いた。すると四人居るけれども二・五しか働いてゐない。親父は働いてゐないが病氣でもして居るのかといふとさうぢやないが、農村には又いろいろ下らぬ家長の用といふものがあるものだ。これはどうしても農村は社會的に整理する必要があるのだが、これは又自ら別問題ですから此處では述べない。

そこでこの二・五の労働は何に供給したか——これはどうしてもその日に記入しなければならぬ。頭が良いと自惚れて溜めて置けば決して出来るものではない。事業別の勞力供給表、これも前の一緒に付けなければ駄目です。それで例へば八月に於ける事業別なら、水稻、或は蠶、或は蔬菜といふ風に書いて、その下に水稻に一、蠶に一、蔬菜に〇・五、合せて二・五の勞力を供給したといふ風に記入する。さうして事業に於ける作業といふ所には水稻は除草をしたとか蠶は何をしたとか蔬菜は施肥をしたとかいふことを付ければよい。すると八月の末になると一號何日といふことが出て来る。親父の成績表などは昔は能く稼いだものだといふ講釋は出るけれども、この頃は働

けなくなつたなといふことで大抵は歎聲を漏すのが常だ。さうして一ヶ月の月表が出来ると更にこれを年表に盛込む。だから一年中掛つて一號は幾らといふことがちやんと出る。それで私の言ふ二百四十日といふのはこの四人なら四人の中で兎に角三百日以上働く人がなければ駄目です。だからして個人主義では困る。一家に道徳觀念がなければこれは出来ない。秋の收穫時分にもう三號四號は二百四十日に達したからこれからは一つ一號二號に頼むべしといふことになれば一家は納るものではない。これは相互觀念がなければ出来るものではない。やるにはやつてもその道理をしつかり知つて道義觀念から結付いて行かないと、必ず親父は働かないといふやうな愚痴が出て来る。文句を言ふなら別になんべいといふのが出て来れば、それでは親父は災難である。それでこれをやつて行くと二百四十日以上而も白米三升以上の報酬を取るといふことは、口では譯はないけれども、なか／＼容易なことでは出来ないのである。それから八月中の水稲に何日、秋蠶に何日、蔬菜に何日といふ月計が出来るとこれを年計に盛込む。さうしてこれが勞力分配表になるのです。一月から十二月までの間の勞力の分配といふものを見ると、營利を目的として一つの仕事を大掛りにやらうとしても決して旨く行くものではない。天然要素は植物だといふので植物農業だけでやつて行く

いふことは出来るものではない。又中には動物だけでやらうといふ者もあるが、動物も専門企業のやうにして行けば一時は儲かることがあるかも知れないが、商店その他の工場と同じで損をする場合もある。吾々も乳牛を飼ひ、鶏も飼つて居るけれども、引合ふときだけやつて引合はぬときには止さうといふことは農家には出来ないのである。さういふ經營だけで行かうとするとやつぱり借金で補つて行くといふより外に途はない。終ひには夜逃をしなければならぬやうな目に遭ふ。それでこの勞力の分配といふことが分らなければ一體事業の生産費でさへ簡単に分りはしない。水稲は何月何日に植付けて收穫まで合計何人の勞力を供給して居るといふことがこの帳面に依つて分れば、何月はこつちの方と勞力が衝突するからこの月は機械を使ふなり、或は栽培方法の改良を圖るなりして、他人などは頼まないでやつて行かうといふ総合した農業經濟といふものが出て来る。それにはどうしてもこの帳面が土臺である。だからして私の所に訪ねて来る人が弱つた弱つたと言ふけれども、何處をどうしてよいのか聞いても分らないから、一年この帳面を付けてそれからお出でなさいと言つてやる。何も言はなくても帳面さへ見ればちやんと分る。この仕事をこの位の分量だけ殖やして行つたなら、君の家は他人などを頼まなくても十圓二十圓報酬を増加する途は幾らでもあ

るではないか。單獨の農業では成立たなくても、甲だけでは成立たない、乙だけでは成立たないといふても、甲と乙とを綜合したその相關關係に於ては甲も成立ち乙も成立つ。これは一體綜合經濟の上からでなければ出て來ない。僕等のやつて居る自分の家の農業でも一つ／＼に切離せばどれ一つでも成立つものはありはしない。それだから私の所に來た人が唯漫然と私の眞似をしても駄目だ。私の所で米を作る部分だけを見てやつても駄目だ。私の所で牛や鶏を飼つて居るのを見てそれだけでやらうと言つたつてそれは駄目だ。能くその道理のある所を研究して呉れと私は常に言つて居る。さうしてこれをやつてこの程度なら先づ大丈夫だといふまでにはどうしても四五年は掛る。今年富民協會から私の縣の篤農家として表彰された對馬善太郎といふ男などは、二十年前に私の所に來てそれ以來ずっとやつて來たから今では押しも押されもしない農業經營者になつて居る。だから五年以上本氣でやつた人は食へないと言つて泣きごとを言ふ者は一人もゐない。決して俺の帳面を買つて呉れといふ意味ぢやないけれども、この農業日誌がなかつたら學校で算盤を習つたの何を習つたのといふことが無駄になつてしまふ。農學校に這入つて教科書と首ツ引でもこの農家經濟といふことは解決出來ない。大學を出たつてさうだ。だから詰らないものでも——こ

れなら今の子供にでも出來るのですから、これはどうかあなた方には是非御研究を願ひたいと思ふ。さうしてやつて見せて、その結果が斯うなる、原因は斯うで結果は斯うなるといふことを道理と實例を以て示せば、どんな鈍感な吾々の仲間でもそれに倣ふやうになると思ふ。

(2) 地力維持培養上無缺陷の組織

第二の條件として地力の維持といふより寧ろ培養といつた方がよいが、培養上缺陷のない組織でなければならぬ。これが近代の科學文明の進展と共に非常にこの方面の缺陷が多くなつて來た。それが爲に肥料の合理化だとか肥料配給案だとか言つてやつて居るけれども、今のやうに科學文明が進んで行けば行く程化學肥料に俟たなければならぬ。殊に硫酸の如きは世界的の問題に今なつて居る。それが爲に不當廉賣だと稱して動もすれば國が關稅政策に依つて價格の維持を圖らんとして居る。肥料會社が立切れない、さうすると金融資本家が立切れないといふので、關稅を高めて農民の負擔を重くしてこれを維持しようとして居る。この瘦馬の如き吾々にそれまで重荷を背負されては堪るものではない。私共はあんなことを平氣でやるといふのならば、何を措いてもそれ等に對しては相當叫ばなければならぬと思ふが、近頃は化學肥料の問題が相當喧しくなつて來て居る。化

學肥料は安いが故に段々これを使ふやうになつた。而も試験場などでその施行率を驗して見ると非常に少費多獲が出来るといふことになれば、化學肥料を使ふやうになるのはちつとも不思議はない。併し一般農家の土壤は試験場の立派な土壤とは違ふので、無機質の化學肥料に依つて生産増加を圖つた結果は、地力の消耗を來すといふことは當然である。地力の消耗とは何か、そこで耕土の構成といふことを考へなければならぬ。何處の土地に行つても何時になつたつて岩や石が崩れた礦物と草木の腐つた腐蝕質が適當に混合されて居る場合に於てのみ土壤の立派な條件が維持されて居る。それに無機質な化學肥料を施して有機質な作物を栽培して行つたら何が消耗するかと云へばそれは腐蝕質である。どの位減るかといふと假に一段の面積から二石内外の米を取るなら、少く共五十貫内外の腐蝕質の消耗は已むを得ない。これを消耗せずして取る方法は無い。それを補ふのに何を以て補ふかといふと、五十貫と言へば僅かのやうであるが、堆肥を以て補つたら、堆肥の中にある腐蝕質は二〇%以上はありはしない。だから二百五十貫内外を補給しなかつたらこの地力の維持は出来ないといふことになる。その堆肥は一體どうすれば出来るかといふと、これは交換の力、金の力では出来ない。自給するより外に途がないものです。幾ら文明が進んで世界共通だと言

つても外國から堆肥などを買ふ譯には行かない。賣手もなければ又假令あつても運賃だけだつて出來た話ではない。幾ら近代文明でもこの缺陷を補ふものは金の力や文明の力で補へるものではない。さうして見ると今の農業組織は營利企業としてやつて行くとこの地力の維持培養上の缺陷が甚だしくなるといふことに歸着する。自給肥料といふことを考慮せずして爲した所の農業經營といふものは永續性がない。どうしてもそれに對する準備が十分に出來て居るからかといふことに付てもう少し力を注がなければ、買つた肥料代が拂へないといふことが直ぐ出て來る。それを拂はなければ食ふことが出来ない。食ふことは繰延が出来ないから、拂ふことを繰延べるより外ない譯である。農業經營上斯ういふ點に付て能く考へて貰はなければならぬ。

(3) 地理氣象の關係と販路又は自家利用轉換

第三には地理であるとか氣象の關係を研究もせず、無暗に試験場あたりに出來たからと言つてその眞似をしてはいけない。地理の關係も構はずにやつて物は出來ても持出すのに困つたり、或は氣象の關係を構はずにやつてやり損つた例は少くない。それから販路又は自家利用或は轉換といふことに付て考慮して作物を選ぶ。賣るといふことが確實に行くかどうか、この點も考へなければなら

ぬが、それと同時に賣れなかつた場合には自分の家の生活に利用し、或はそれが出来なかつたら自分の事業に轉換して行くことの出来る性質のものを選ばなければならぬ。唯單に他の者の眞似が出来ないやうな物を作つて、市場價格に依つて交換するといふことだけしか考へないでやつて行く駄目である。現在の養蠶の如きはその一例で、賣れないからと言つても家で使ふには贅澤過ぎるし、それかと言つて繭になつたものを他の事業に提供する譯にも行かない。だから繭價が半分或は三分の一に下つても賣らなければならぬといふ悲惨な状態に陥る。豚が高く賣れるからといふので高い時分に子を飼ふ。飼ふときには高くても、皆が高いから高いからといふので飼ふから、賣る時にはスツカリ價格が下落してしまふ。下つてしまつてもどうにもならないから結局子を買つたときの値段より少し出た位の所で賣つてしまふ。又去年西瓜が高かつたからといふので澤山西瓜を作る。まあ今年は天候の加減で餘程調節されたいが、あれは天候が順調だつたら今年も西瓜の洪水で随分弱つたことだらうと思ふ。この點は農業組織の上にもどうしても考へて貰はなければならぬ重大なる點である。

(4) 土地建物機械等の固定資金

第四は土地建物それから機械等の固定資金を徒に投じないといふことです。日本の百姓は、百姓は小さいけれども資金は大いに投じて居る。さう言つたら怒るかも知れないが徒に投じて居る。その比例を申上げて見ると、全國の農業經營などの統計から見ても小農經營でありますと一萬圓以上の資本を投じて居る。その中七〇%内外は土地資本に投じて居るから、七千圓内外といふものは土地の價格だ。殆ど骨董品視してゐると言つてもよい。その土地の資本が一體この勘定の仕方本當ぢやないと思ふが、その土地に行はれて居る小作料の率から判斷して見ると、物價の高い時に年三分内外にしか廻らぬ。それに對して年一割近くの高い借金をして土地を借りてやるといふのは、考へ方が悪い譯ぢやないが、それが爲に亡びて行く農家が幾らもある。今國家が行ふ所の自作農創定資金といふものも——私は毎年縣の百姓を代表して審議員といふので審議會に出るけれども、あんなことをやつても果してやつて行けるかどうかと當路の人に聞いて見ると、曖昧に言葉を濁して居る。殊に昨年などは米が一石四十圓近いときの計算を基礎にして、小作を拂ふ割合と同じ位で年三分で二十餘年間にこれを返して行けば、小作を拂つた割合と同じ状態で自作農になれるといふのだが、一石十六圓位に暴落しても金で決めてあるから同じ割合で拂つて行かなければな

らぬといふことになつて、終ひには先祖傳來の物まで賣つて拂はなければ納まりが付かぬやうな結果を來しはしないかと私は祕かに案じて居る。一體二十何年も先のことを金を基準にして決めて行くといふことが無理である。四十圓の時も十五圓の時も同じやうに現物で拂ふやうに決めればよいが、金で決めて居る。若しも半分ぐらゐ拂つた後にその償還能力がなくなつて、後は、その土地を處分しても尙ほ拂切れないといふときには、それを一體どうして片付けるかと聞くと、そんなことは吾々小役人には分らぬ。特別な法律でも出来るのでございませうと言つて逃げて居る。然らば建物はどうであるかといふと、平均一七%内外の資本を投じて居る。外國に行つて見て御覽なさい。そんな馬鹿なことはありはしない。さうして日本の農業は建物の資金はその償還の途さへ立つてゐない。殊に養蠶をやるやうな所になると二〇%内外大抵掛けて居る。機械や何かもさうです。農學校でも出たとか少し農業に熱心だとかいふ者になると、改良農具を試験場や農學校の農具みたやうに無暗に陳列して得意になつて居るが、そんなことが必要なものであつたら共同で購入すればよいのです。さうして反面に肥料を買ふ金さへない人が多いのだからをかしい。肥料は借買だといふ。そこに組合の必要が起つて來るのだが、今日無産黨が能く叫んで居る所の所謂土地の耕作

權といふかそれがハッキリ確立されてゐないから一體斯ういふことが行はれるので、そんなことは、共同の力で所有しなくとも耕作して行ける途はあるのだ。私共は貧弱ながら協同の力で組合がこれに干與してやつて居る。それだから公平に眞面目にやつて居る人ならば、土地を所有してゐるやうが、るまいが、そんなことが一家の經濟の上に輕々しく變化を與へるといふやうなことはない。これはさう急には行くまいが一つ御考慮を願ひたい。

(5) 生産費と流通資金

それから生産費も考慮の中に入れ、生産費と自分の報酬を考へなければならぬ。賣れないやうなものを眞に受けて作る必要はない。生産といふものは消費の爲めの生産でありますから、消費と生産とが伴はぬものは駄目である。さうして常に流通資金に不足なきやう注意しなければならぬ。これが今は非常に缺けて居るから常に不足のないやうに心懸けねばならぬが、これはどうしても共同でやらなければ出來ない。

以上述べた五つの事柄はこれは理論であつて、これを誰にでも實現の出來るやうにして行くといふことが一軒の農業組織だといふことになる。さうしてこれが爲にはどうしても組合で協力してや

らなければこの實現は出來ない。吾々は貧弱ながらこの理論に依つて何十年間これを實行して來たが、漸くこの問題が片付いたかと思ふと又事情の變化變遷に會ふ。だからしてこれは何時まで吾々がやつても中々最後の所まで爲し遂げるといふことは出來るものではない。それでこれは誰にでも出來るのだといふ意味合から私の所でやつて居る組織を一つ實例として申上げて、あとは御判斷に委せることに致しませう。

私の所でやつて居ることはこの理論を實際に自分がやつて見て信じ得られるが故に、他人にも勸めてゐるのである。一體自分に確信のないものを他人に勸めるといふことは言換れば罪惡である。やれさうもないと決つてゐることを他人にやれと勸めるのは罪です。又そんなことを言ふ人なら、その言ふことは信じ得られないからして聞くだけ無駄だといふことになる。私の所では誰にも出來ないやうな仕事はやつてない積りである。先づ人間の數であるが、現在は十六人居つてその中壯者は七人居る。尤もその中肩が二人居るから——私もその肩の一人だが——あと五人しかない。私と長男が肩です。私が組合長で組合の爲に働いて居るし——私の村の組合は總て無報酬主義である——長男は長男で身體は丈夫なのであるが組合の肥料の係の主事をやつて居るから家の仕事は出來

ないので。此處で序でに申上げて置くが、一體肥料の買方が上手だとか下手だとか、豆粕が一枚一錢高いとか安いとかいふことは問題ぢやない。肥料の使ひ方の上手下手といふことが重要な點である。だからその點から言ふと知識の缺陷——私は農村の二大缺陷と常に言つて居るが、その中の知識の缺陷といふことが非常に重要視されて來る。同時に地力の缺陷、それに次ぐものが金であつて、金は餘り主ではない。明治四十年頃は豆粕幾らといふやうな肥料の申込は取扱はなかつたが、それが段々今日になつて殖えて來たものだから、今では何時の年でも米とか麥とか或は桑、蔬菜、さういふものに對する肥料の使ひ方に付ての研究の實習地が十ヶ所程ありますが、そこでどの程度に作つて一體どんな使ひ方をして行つたら宜いかといふ研究を試験場や農會と連絡を執つてやる。さうしてそこに始めて始めて肥料の分量を決める。この肥料の分量を決めるには栽培の基準が決めぬと決まるものではない。肥料は同じやうに呉れてやつても稻の植ゑ方が違へばその反應も違ふのです。それで組合の立てた標準に依つて申込んだものだけを扱ふといふことになつて居りますが、それが延にすると一千町以上になつて居ります。だからして言換ると私共の組合は肥料代が高いの安いといふことはさう問題ぢやない。この肥料の使ひ方如何といふことが——千町歩以上の耕

作地からは今日の如く農産物の価格が下落したとは言つても一年に六十萬圓乃至七十萬圓の生産があるのだから、その一割減つても六萬圓乃至七萬圓といふものは生産減少になる。さういふ關係になつて居つて、これは私共の組合の重要な事業の一つになつて居る。これには委員が出来て居つてその委員の互選に依つて一人の主事を置いて居るが、その主事に私の俸がなつて居る。さうして専務理事といふのも二人あるけれどもその専務理事でさへ私の所では無報酬です。それから役員とか委員とかいふものは全部合はせると百七十幾人も居るがこれが全部無報酬である。そのやうな關係で私が組合長、俵が主事として組合の爲に働いて居るので私の家の壯者は五人です。それで私の所では天然要素としての耕地は二町六段で、その農業組織は水稻が一町歩、麥が八段歩、果實、これは主として桃であります。四段歩、蔬菜が七段歩、桑が六段歩、それから動物を飼つて居るから飼料作物が六段歩で、この計が四町二段になります。今までの農業だとこれだけの農業で外に蠶を飼ふといふ位が普通の農業状態であつたのであるから、失業にも陥つた譯であるが、これだけでは私の所では生活資源は取れない。第一私の主張する農業經營の五條件といふものには何も交渉を有たない。勞力分配が出来ない。地力維持培養が出来ない。或は自家利用轉換もこ

れでは出来ない。一つも生産費と報酬とが伴はない。そこで所謂人爲要素としての農業、有畜農業といふものを加へてやつて居る。それは馬が一頭、乳牛が四頭、豚が三頭、それから鶏は種鶏として百五十羽、補充が百五十羽で計三百羽飼つて居る。これは組合の養鶏部の種鶏を私の家で管理して居るので、養鶏部員の要求に應ずるにはどうしても二萬乃至三萬羽の鶏が常に養鶏部員に納まらなないと間に合はない。それで最早今日ではネスト調査をして系統の正しいもので二百以上の産卵をする鶏を飼はなければ合ふものではない。そこで私の所ではネスト調査をして毎日一時間置に系統を正して、二百以下のものはどん／＼淘汰して行く。さうしてこれを養鶏部員に安く分ける。國の種鶏場や縣の種畜場があつて人並面をしてやつて居るが逆も私の村には及ばない。それから蠶は他人を頼んだりしてはやらぬけれども、三度やつても三度で百八十貫の上繭を取るといふことを標準にしてやつて居る。これだけを他人を頼まないでやるといふことになる。失業には陥らない。さうして報酬も白米にするなら一日一斗ぐらゐになるから、それで吾々は暮しが立つて行ける譯である。

それで次に如何して斯ういふ組織を作るかこの相關々係を簡單に一言申上げて置きたいと思ふ。

私の所に来る人は能く斯ういふことを聞く。何が一番儲かるか。何も儲かる事業はない。何が一番損だね。苟も農業は職業なのだから損になるやうな事業は食へなくなるからやらないと答へる。それでは分らないではないかと言ふのですが、これは農業経営といふものは総合経済相関々係の道理が分らなければ農業組織は分るものではない。一體今まで餘りに分類的であつたからして、或は試験場などでの試験が分類的になつたものであるからして、これを適用する場合に餘程考慮しないと、総合経済といふことを無視すると農業組織は理論倒れでバラ／＼になる。総合経済、相関々係、そこに組織の妙味といふものがある。或る人は私の農業の組織を極意だと言つて居るそれは斯ういふのです。植物農業だけでも成立たず、動物農業だけでも成立たない。この植物農業と動物農業が一緒になつて始めて成立つ。この相関々係です。例へば植物農業で今まで合ふとか合はぬとかいふことは市場の価格で賣る、交換する所の価格標準で合ふ合はぬといふことを言つて居る。例へば米を三十石取つた。それが一石十五圓なら四百五十圓にしかならない。それだから合ふとか合はぬとかいふことになるので、私共から言ふとそれだけが農業ぢやない。市場価格の支配を受けない所にも吾々は生産をして居る。さういふ點からこの植物農業から生産する所の残物、例へば

稲の藁とか麥の藁とかいふやうなものにどういふ風な価値を見るかといふと、この価値の發生は堆肥といふ形になつて現はれて来る。詰り單一の植物農業だけなら堆肥としての、価値以上の価値の發生は見られない。併ながら堆肥は腐つてから値打がある。それを腐らないうちに価値付けるには一體どうすればよいか。飼料として用ひればよい。私の所では二萬貫以上の堆肥が出来るが、堆肥の値打は今日帝國農會あたりで申合せたものに依ると百貫二圓十錢しか値打がない。だから二萬貫あつた所が四百二十圓です。それ以上の値打を見出すことは今までの農業組織では出来ない。所がそれを適當な飼料に轉換する。適當な動物を茲に加へたらどうなるかといふと、その飼料の価値は肥料の価値より遙に大である。少く共これを飼料価値として轉換すれば五百圓乃至六百圓にはなるでせう。尤もこれは市場價格ではない。市場にそれを持出したつて誰も買ふものはないでせう。自分の家にこれを轉換して行く。詰り総合経済の農業組織に依つて今まで堆肥以上に価値付けることが出来なかつたものを、茲に飼料価値として發生せしめることが出来るから、それだけは報酬の増加になることは明かである。斯ういふ組織に依つて生産費も安く、生産手段も最も進んで居るが故に、今日専門企業家がやつて行くことが出来ない中に於ても吾々はどうかやつて行けるのである。

る。牛にしても卵にしても或は豚にしても吾々の生産費は専門企業家に較べるならば遙に低い自給飼料を以てやる。又米にした所で過半は家でこれを消費する。賣るのが目的ではない。賣らないと決めて置けば市場価格がどう變動しよう一つも心配する必要はない譯です。兎に角賣手と買手が同じなのだ。買手がなければ只でもよい。これを自分の事業に轉換して行く、自分の家庭にこれを轉換して行く。然らばさういふ稲の藁とか麥の藁とか或は蔬菜の残物などは飼料としてどんな動物に向くかといふと、鶏や何かでは駄目だ。また鶏が麥藁を食つて卵を生んだといふ話は聞かない。さうなると斯ういふ藁類を相當に價値付けて行く動物はないかといふと、ない譯ではない。それは牛である。牛なら立派な飼料になります。牛の飼料に向かぬなら豚、豚に向かぬといふなら鶏に轉換すると價値が出て来る。さうするとさういふ植物農業の残物、堆肥の値打といふものはどれ程のものでもないが、これを飼料として動物に食はせてその結果出て来る排泄物、これを土地に肥料として循環して行けば、地力維持培養といふ問題が解決する。肥えた土地に作物を作るなら栽培の方法はさう難しいものではない。この厩肥で三石ぐらゐの米は取れる。況や桑などは殆ど金肥はやらなくても八百貫から千貫近い桑が取れる。さういふ生産費の安い桑で飼ふなら蠶だつて遊ん

で居るよりはよい。今のやうに一貫目の桑が二十錢も掛るやうな桑の作り方をして居るから引合はないので、私の所では五錢か七錢しか掛らないから、今日の如く藁價が下つてもちやんと働いた報酬といふものが出て来るのである。さうして又蠶が上簇した蠶座は動物の飼料にこれを轉換して行く。だからして私は能く言つて居ることだが、少く共動物と植物といふものが適當に加つて行けば、植物の生産といふものは二割内外必ず肥料を減らしても増加して行くものである。植物の計算だけでは出て来ないものが動物と關聯すると出て来る。だから私は斯ういふことを常に言つて居る。働くといふやうなことは理論だけちや分らぬから、働くことの出来るやうに生物を監視に使へ。横着な人間なら人間の監視が付くけれども吾々は悪いことをしたのでないから、動物の監視で口のあるものを付けて置けばよい。さうすると元日であらうがお盆であらうが——植物農業なら休むけれども、私等の農業にはこれが監視してゐるから年百年中飼料を持つて行つてやらなければならぬ。こつちが忘れても向ふは腹が空いてゐるから忘れっこない。その場合に家族が手不足なら家内といふものがあるでせう。だからこの受持は家内で結構です。これを呉れてやれば元日だつて乳を出し、お盆だからと言つて卵を生むことを休みはしない。そればかりではない尻から肥料と

なる排泄物が出て来る。これを二町六段に公平に分配すればよい。田中總理大臣は曾て肥料の公平なる分配と言つて囁いたがこれは間違つたことではない。これを公平に分配して行けばよいのである。さうして行くなら安い化学肥料を入れて而も最大の施行率を納めて行くことが出来、茲に始めて科學文明といふものを有効にとりいれて行くことが出来る。併しこれを一人々々でやつたら一つも合ふものはない。だから私の農業で組合に關係しないものは一つもない。これを實現する爲にはどうしても組合との關係を保たなければならぬ。米にしても肥料にしても蔬菜にしても麥にしても皆さういふ關係を有つて居る。果物の如きは園藝部といふものがあつて市場を經營して居る。其處に持出せば個人々々が直接に賣らなくても園藝部でちやんとして呉れる。さうして直面目なものを正當な値段で賣るといふことになるはずと遠方からでも買に来る。それから家畜のやうなものは搾乳部といふものがあつて、それに要する設備のやうなものは全部組合が施設し、さうして出来たものは一切組合がこれを賣つてやる。それから生産の基礎になる所の種牛或は種豚或は種鶏のやうなものは養鶏部に依つてそれを養つてやらないと、唯出來たものを賣るとか買ふとかいふことだけでは根本問題が片付かぬからさういふことも組合でやるのです。

それで私は群馬縣の農家の標準農業として斯ういふことを言つて居るのです。今のやうな實情であつても家族が六・七(壯者三・五)天然要素が一町一段位であるならば、これを工夫して行くならば粗收入一千圓は取らなくちやいけない。これは最低の標準であるが、千圓より少いときは一體當り前の人間として世に立つことは出来ないと思ふのです。さうしてこの千圓の粗收入の中にはどうしてももう少し人為要素を加へて行かなければならぬ。馬は共同で結構です。馬なり牛は二軒半に一匹ぐらゐで結構です。豚は二匹、それから鶏は二十羽乃至三十羽位飼はなければならぬ。それから養蠶なども遊んで居るよりは或る程度まではしてもよいでせう。それでその粗收入の割合を言ひますと、千圓の中で一八%即ち百八十圓は人為要素たる養畜から取らなければならぬ。それから養蠶は三百圓内外、それ以上は私は考へものだと思ふ。それから耕種農業の中の蔬菜のやうなものでも百四十圓は取れる。それから麥では十三圓、米で二百二十七圓、その他の副業のやうなもので八十圓取れる。これは工夫をして行けばこの割合で行くことは決して無理ではない。さうしてこれだけ取ることは取つても組織が悪いと出し分が多くなるから注意する必要がある。私の經營費用の案では、肥料代はこれだけの農業をやつて行くのに九十五圓あれば澤山、百圓は要らない。そ

それから養蠶飼料その他の飼料が百六十圓、勿論自給飼料といふことは十分に考へなければならぬ。それから報酬の割合を申上げて見ると、地代はこれは私は小作農として茲に標準を採つたのであるが、通例の場合に於て地代は一九・五%百九十五圓あれば澤山です。それより高いといふのはそこに無理があるので、小作争議を起す必要はないが改める必要がある。それから消耗資本が二五・五%二百五十五圓掛る。さうしてその他に吾々の勞力の報酬が五五%。少くも自分の所で取つたものゝ總體の五〇%以上家の者の働いた報酬を取るといふことを原則として農業組織を考へて行かなければ駄目だと思ふ。

二 農家家計方針の確立

これに付てはもう時間がありませんから省くことにして唯項目だけを以下簡単に並べてあとは皆様の御判断に委せます。

分度生活

これは換言すれば豫算の生活である。今日のやうな物價の低い時であつても粗収入千圓の内容は

今のやうなことを工夫して行くのであるならばこの程度の生活しか出来ないのではありませんが、取りました農業の中から金額の比例で言つても、自分の所に現物處分をして行く、自家或は事業にこれを轉換して行く——主要食糧は皆これを轉換するものとして考へると三百三十八圓即ち三三・八は、自給が出来るのです。この三百三十八圓といふものは自家の利用或は自分の事業に轉換するのですから、安い高いといふ心配は要らない。けれども今日は何と言つても現金の支出が非常に多いから、これを現金に換へて行くと、現金に交換するものは斯ういふ割合になつて居る。六百六十二圓といふものは現金に換へなければならぬ。自給自足の何のと言つても、千圓の農業或は農家の粗収入の中、六百六十二圓といふものは現金に換へなければならぬ。どうしてもこれより少くは農家の経営はやつて行けない。だからこれを適當に低めようといふのには一戸々々がやつたのでは出来つことはない。この六百六十二圓の中、肥料とか其他農業經營の爲に要する現金支出がどうしても三百二圓は掛る。さうすると三百六十圓しか家計に廻る所の現金の支出能力がないといふことになる。成べく食物を買はないで農業經營費の一切を拂つて残りの三百六十圓の現金支出で一家の家計を賄つて行かうといふことになる、餘程無駄事を省いて行かないと出来ないのがあります。先づ

住宅の爲に要するものは私 の案で言ふと二十八圓以上の支出能力はない。それから購入食料、自給自足の外に食料の爲に出す所の割合は三十五圓以上の支出能力はない。それから衣服の如きものに對して購入する所の限度は四十七圓の支出能力しかない。それから光熱費が二十圓、これは以前と違つて文明に恵まれたお蔭で今日は餘計掛る譯です。それから什器に十圓、それから修養或は教育費が三十三圓、それから交際費、これは今までは全國の家計調を見ると非常に多いけれども、三十圓以上の支出能力はない。それから一家を支へる爲に土地や何かを別にしても戸數割その他に支出するものでどうしても三十五圓内外を要する。それから娯樂とか嗜好といふものに對して支出する標準は二十八圓以上はない。それから健康を保持する爲に醫者に掛り藥を貰ふといふやうなことに對しては二十八圓以上掛けないやうにしないと足らなくなる。それから冠婚葬祭の費用も三十圓以上は一年に負擔の力はない。その他三十六圓と斯ういふ標準になつて居る。詰り千圓の粗收入のある農家は斯ういふ風な総合的農業經營をやつて居つてもこの範圍でその生活を支へて行かなければその生活の分度を守ることが出来ない農家といふことになる。

甚だ不充分であつたが、斯ういふことを行ふといふことになる——先程も申上げた如く農業經營の方面から考へてもその實現は共同の力に俟たなければならぬが、この家計の方面から考へて見ても、自分一人だけそれを決めても實現は出来ない。やはりその農村の社會の實狀がこれを認めるといふ氣運に満ちて居らなければならぬ。協同の力に俟たなければならぬことは勿論である。斯ういふことになる組合の關係は農業の方面ばかりぢやない。生活の方面にも可なり澤山の關係を生じて來るといふことになる。それから分度生活の實行と共に主要食料品の自給——米とか麥とか蔬菜とか味噌醤油等を自給するのであるが、これにも協同の關係がないと駄目だ、醬油一つ作るにしても一戸々々ではやつぱり成立たない。尙ほ日用品を購入するといふ消費經濟を圖るといふ點に於ても、協同行はないとこの分度生活の實現が出来ない。それから尙ほ家屋であるとか家具であるとか或は家畜といふやうなものに對しての銷却或は積立若くは豫備金の繰越といふやうなものも必ずこれの中に認めて行かなければならぬのであるが、さういふことも一切共同の關係即ち組合の關係といふことになつて來る。

大分時間が進みましたから組合のことは項目だけに止めて御免を蒙ることに致します。先づ組合の關係を申上げるのはどうしても組合經營の方針がしつかり決らなければならぬ。それには先づ

第一にお互が正しいと信ずる人生観を有ち正直且つ眞面目であることが必要である。一體正直で眞面目な人がその日の暮しに困るといふことは、必ず其處の社會組織なり制度に缺陷があるからである。だからしてさういふものには助け合の力に依つて知らない人には教へてやる、知つて行はない人には反省を促す、金のないやうな人には有る人が融通してやる。さうして外部に對して賣るとか買ふとかいふことは勿論組合の關係でしてやる。或は鶏とか豚とか牛とか優良な種を買ふ場合でも、商人や何かを相手にしてやつたのでは駄目であるから、さういふ生産の基礎になるやうなものは組合が用意をしてやつてやる。

そこでお互がさういふことをするのに信用の程度を評定するといふことがこの産業組合の特色の一つです。これは外にない。人間の信用を委員を設けて評定をする。その評定の標準を作つて置く。これは産業組合以外の今の社會にはない特色の一つです。これには私の所では四つの條件を設けて居る。第一はお互の人生觀、お互が觀た社會といふものに對しての意識とそれから道義の基準、それを表はして見ると資産といふものにも標準點を見る。それは假に滿點百點としてその中四十點の標準を置くが、この中二十點といふものは固定の資産に見て、固定資産全部を四十點と見な

い。金持だからと言つて全部を見ない。假に確實な資産一千圓に對して一點といふことになる。二萬圓の資産があれば二十點といふものは認めるが、それ以上の資産があつても——例へば吾々の組合でも三十萬四十萬の資産を持つて居る人が幾らも居るが、二十點以上は認めない。さうしてあの二十點はこれは金持は金持の勤むべき道を踏むといふ所の組合を通じての資産、或は出資金であるとか或はその人が貯金をして居るといふやうな組合資産といふものに對してこれを見て居る。これを五十圓を一點とすれば二千圓あれば二十點と認める。さうしてこの義務を負はない所の資産といふものは正しい意味の資産と認めることが出来ない譯です。

それから第二は職業に勤勉でない人は吾々は認めない。職業に勤勉であつてさうして産業の經營並に作業上の技能のある人でないと駄目だ。これに二十點の標準を置く。さうしてこれもその中の十點は働くといふことです。家族が共に働くといふことの實現の出來てゐるものに對して十點を見る。さうして働いてもその組織や作業上の技能がなくて無駄な働きをして居つては駄目で、あの十點はその者の働きと生産の割合を見る。それが私の方では組合の方の貯金の一つとなつて、生産統計貯金といふものを一年に二期に分けてやつて居りますが、これは金を蓄める爲めの貯金で

はなく、これをやればその農業組織の如何といふことも技術の如何といふことも分る。吾々が一々廻つて歩かなくてもこの貯金の臺帳を見れば、その農業組織はこんな風だとか或は數年前に較べてあの家の農業は衰微をして居るといふことが直ぐ分る譯です。

第三は生活の程度がその分度に應じて宜しきを得て居らなければならぬ。さうして家庭が圓滿でなければ信じない。これにも二十點の標準點を見て居るが、その中の十點は分度生活である。繰越金を見なかつたり或は何でも構はずやつたりしてはこれは全然零である。あとの十點はその一家の親が親らしき、子が子らしき、夫婦が夫婦らしき考を持つて居るかどうかといふことで決める。それで私の所ではその家庭事情、社會事情監視の意味で、何處の部落にも三名以上の信用の程度を評定する委員があつて、それが監察係になつて居るので、夫婦喧嘩とか親子喧嘩があつたといふことになる、それが忽ち手帳に載る譯です。その爲に妙なもので私の所ではさういふ家庭不和といふことは可なり少い。

第四は至誠に缺けた人とは一緒にならない。それから道義上缺けた行爲のない人でなければならぬ。これにも二十點の標準點を置いて居るが、その中の十點は誠意を以て事に當る人、さうして公

共利益の爲には應分の義務を辭せざることといふ標準を見て居る、だからして村の世話なり或は公共團體の世話なりを村の人々から頼まれたならば、誠意を以てそれに當らなければならぬ。さうしてその人の應分の義務を果す。例へば金を有つて居る人ならば金を以てその義務を果す。或は金はなくとも知識のある人ならばそれに應じて義務を負はなければならぬ。斯ういふことが私の所では標準になつて居る。それからあとの十點は約束を守ることです。さうして自己の損得の爲に他人に迷惑損害を掛けない。私的勘定若くは利害關係の爲に他人に迷惑を掛けるやうなことをしないと

いふことが當り前になつて居る。

以上が私の所の標準であるが、これが組合の事業と結び、組合員の農業、組合員の生活といふやうなものと渾然結付いて行けばよい。さうしてこの頃は生活改善といふやうなことで組合の事業そのものでいろ／＼な無駄な費用を省くやうにして居る。例へば冠婚葬祭には一年にこれだけしか費用を掛けないといふ風に組合で決める。又患うても醫者に掛れない人があつたり或は兵役の義務を負うたが爲にその一家が支へられぬといふこともあるのだから、さういふ者の爲に救護規定が出来て居りましてさういふ者に寄附をする。中産以上の人ならば、その分度内で生活をして冗費を

省はいて行かけば寄附よが出来でるから一年いっ年に三百さんや五百ご百の金かねは組合くみありに浮ういて来る。その金かねで醫者いしやを特約とくやくして貧困ひんこんの人々ひとに醫療いりやうを施ほす。さういふことまで協同けいどうの關係くわんけいで組合くみありが世話せわすることになると、そこに於おいて始めて農家經營のうかけいの二つの要件えんけんを完まうすることが出来る。唯一遍たいの話はなしぐらゐではお分わりにならなかつたかも知れないが、これにはどうしても口くちで理論りろんや何かで傳つたへるよりも、或あるは幾いくら書いたもので傳つたへるよりも、理論りろんだけは一旦たん知らせてあとは自らみづかりやつて範はんを示しめすより外ほかないと思おもひます。洵まことに時間じかんが少すくないのに下くだらぬことを申ま上げてお分わりにならなかつたことと思おもひますけれども、私わたくしの話はなしはこれで止とめて置おきます。(完)

昭和六年十二月十日印
昭和六年十二月十五日發行

農家經營の實際

定價十八錢

不許
複製

編輯人 熊谷辰治郎
印刷人 君島 潔
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社

發行所 東京市四谷區
明治神宮外苑霞丘口
財團法人 日本青年館
振替東京六〇七七八番

終

